

# ミステリ読書案内

2024. 4. 12 発行元

第566号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

## シューヴァル&ヴァールー「ベスト表」(再掲)

スウェーデンの警察小説『マルティン・ベッグ』シリーズの作者であるマイ・シューヴァル&パール・ヴァールーの作品の『ベスト表』を取り上げてみる。私が高く評価している10冊のシリーズである。

### スウェーデン社会を描き出す

私が持っている「警察小説」のイメージは、この『マルティン・ベッグシリーズ』とエド・マクベインの『87分署シリーズ』が基本である。警察の組織としての動きが描写されるのが良い。最近の作品のように、一人の警官の家庭の問題や健康面の悩み、犯罪者に対する個人的な認識等を中心に描くべきではない。仕事に真正面から取り組む姿が書か

れていれば、その登場人物がどんな人なのかは十分に伝わる。内面の葛藤など書く必要はない。そんな意味で、この『マルティン・ベッグ』シリーズは学ぶべき点が多い。

以前の『代表作』の号では『笑う警官』『密室』『テロリスト』を取り上げた。今回は初期の作品から『蒸発した男』を、後期の作品からは『警官殺し』を選んでみた。

スウェーデン社会の十年の変化を描き出すという試みがよく感じ

#### 《マルティン・ベッグ・シリーズ・ベスト表》

1. 笑う警官 1968年
2. 密室 1972年
3. テロリスト 1975年
4. バルコニーの男 1967年
5. ロゼアンナ 1965年
6. 唾棄すべき男 1971年
7. 警官殺し 1974年
8. 蒸発した男 1966年
9. 消えた消防車 1969年
10. サボイ・ホテルの殺人 1970年

#### 《日本語訳のヴァールー単独の作品》

1. 爆破予告 1964年

られる。当時の世界の情勢だったり、人々の関心や意識、SNSなどなかった時代のことが思い出される。その時代なりに人々は懸命に生きているのだと感じる。

### 「蒸発した男」

1966年の作品。私の手元にあるのは角川文庫版。シリーズ第二作。本作はハンガリーを舞台にしているのが特徴である。異国で活躍するマルティン・ベッグはいかに…。

マルティン・ベッグは夏のバカンスを過ごすため、ストックホルムを離れて家族が借りた群島のコテージに向けて出発する。ようやく取れた休暇で、家族と一晩過ごしたところへハルマン主任警視から電話がかかってくる。「きみ以外の人間には頼めん仕事なのだ」と言われ、しぶしぶ戻ることになる。「一時間後に外務省に行ってくれ」と指示され、「蒸発した男」の話を書くことになる。ハンガリーで行方不明になったのはルポライターのアルフ・マトソンという人物。ブタペストに行っても十日音信不通になったとのこと。雑誌の編集部から警察に連絡があり、動き出すことになったらしい。警察側にとっても事情があり、公安部がマトソンの動きをマークしていて、要注意人物と目されていたのだ。1960年代と言えばソビエトが強力な時代で、当時の東欧諸国は「カーテンの向こう側」。スウェーデン・ハンガリーの友好関係に響くかも…などという話を聞かされる。ベッグは外務省職員の肩書でブタペストへと出発。ストックホルムのコルベリと連絡を取りながら捜索を開始する。マトソンの愛人だという女性を訪ねてみると「知らない」と言われた。そのうちにベッグの後を付き纏う影に気付くことに…。組織の力が使えない土地での孤独な捜索行。果たしてマトソンを探し出すことが…。

### 「警官殺し」

1974年の作。私の手元にあるのは角川書店の単行本。シリーズ第九作。シリーズのまとめの段階に入り、第一作の『ロゼアンナ』と第二作の『蒸発した男』の続編的な内容になっている。スウェーデン社会の十年間の歩みを描き出すという意図でに沿って作り出されたストーリー。

冒頭にプロローグのように出てくるのは女性の殺害場面。そしてすぐにベッグとコルベリの日常の捜査活動の話に変わる。宝石店に強盗に入った事件の容疑者を見張る役目。一度拘束したのだが証拠不十分で釈放せざるを得なくなり、泳がせてみてブツを隠している場所に案内してもらおうと考えたのだが…。失敗。そんな様子の所へ別の仕事で舞い込む。スウェーデンの南端の田舎である女性が行方不明になった。自家用車が壊れていた。バスで町に買い物に来たのだが、その後姿が見えなくなったという。問題は、彼女の家の隣に住み始めたのが七年前のロゼアンナ殺害事件の犯人だったフォルケ・ベントソン。刑期を終え、この地に来て、魚の燻製を作って生活するようになったという。殺人者は再び犯罪を犯したのか。ベッグはベントソンを尋問してみる。感触としては無実のように思えるのだが…。地元の警視長は強引に逮捕するように主張する。時を同じくして、ストックホルムでは警官殺害事件が発生し…。ということで「警官殺し」という題名に結び付いていく。ポイントは犯人像。一度罪を犯した者は更生するのか、はたまた犯罪に手を染めるのか…。